私の宝箱

旅の副産物・「知るを楽しむ」

横地 光子

結婚をする時に「新婚旅行はどこに？」と周囲の人から聞かれ、インド、ネパールに行くことを告げたら院内のある医師から「大丈夫か？新婚旅行でそんなところに行って！」と忠告を受けた。何年も経過した今でもよく覚えている。しかし、いまだにその意味するところは明らかではない。当時のインド、ネパールの旅行は大変で、スケジュール通り移動することは不可能といっても過言ではなかった。ニューデリーの空港に到着しても荷物が出てくるまでに数時間を要した。航空会社のストライキで国内移動もままならず、待ちぼうけの時間が長かった。幸いにもそんな時間を田舎の観光地で過ごすことになった。予定外のヒンズー教寺院でのんびりできた。種々の彫像を眺める時間もあってヒンズー教はどんな宗教かとさらに興味が高まった。お正月には七福神の乗った宝船の絵を見る機会が多いが、日本では縁起物とされる七福神の中にヒンズー教出身の神様がいることを知ったのもそれがきっかけだった（因みに大黒天と毘沙門天）。それ以来、我が家の旅のテーマの一つに「宗教」が加わり、東南アジアを巡った。かなりサバイバルな旅もあった。

旅をしながらぜひこの感動を写真に残したいと思うことは多々ある。完成した写真をみると「私が撮りたかったのとはちょっと違うな」と感じることが多くなり、一眼レフカメラに挑戦することになった。自分の望む画像にするにはどのような設定にするか、構図をどうするかなどを考えるようになった。いままではただ単に「記念写真」であり、「日の丸型」の構図であったからである。寺院や教会などの建造物や風景はもちろんであるが、草花も撮影するようになった。知らない植物の名前を調べることにより、名前の由来やその花にまつわるエピソードなども楽しむようになった。カメラのファインダーを覗いている時は「無」になれるのもよい。

我が家の旅は東南アジアから欧州へとシフトしていった。あまり絵画美術には興味はなかったが、「宗教」という旅のテーマでも絵画とは切り離せなかった。教会にも多数の絵画がある。有名どころの美術館は一応見学することにしていた。そのうちに絵画にも魅了され、旅から帰るとその絵画や画家について調べるようになった。絵の持つ神秘性や画家の人生に思いを馳せたりと楽しみ方はいろいろ。絵画の構図や光の使い方は写真撮影にも参考になっている。こうして今では美術館や教会での絵画鑑賞は旅には欠かせなくなった。旅は「異文化に触れる」、「非日常を楽しむ」などの魅力があるが、「知らなかったことを知る楽しみ」も旅の副産物となっている。ある興味が次の興味にリンクしていき、新たな発見をまた楽しんでいる。これが、私の活力になっているようだ。恥ずかしながらまだまだ知識不足は否めず、これからも相当楽しめそうである。（リハビリテーション部　作業療法士）

絵本の世界「しゅくだい」

原　案：宗正美子
文・絵：いもとようこ　岩崎書店

和田 彰

私が子どもの頃、家に絵本はそれほど置いてなかったと思うが、それでもいくつか印象に残っているものや、懐かしいと思えるものはあります。そんな読んでいた絵本や好きだった絵本を、子どもが保育園から借りてくるとなんだか嬉しくなります。我が家では、子どもが寝る前に絵本を読むという習慣があり、親の私もいい絵本に出会えたり、懐かしく思ったりしています。

私がこの絵本に出会ったのは、ちょうど下の子が産まれる前のことで、妻がいい絵本があるよ、と買ってきてくれたのがきっかけでした。上の子が赤ちゃんに親を取られたと思わないようにと、あれこれ考えている時期だったので、上の子に読んだ時、目頭が熱くなり、嬉しく思いました。その日は、子どもが寝てからも何回も読み返したのを覚えています。

私の好きな所は、それぞれのだっこのシーンです。お母さんはやさしく、お父さんはぎゅーっと強く、おばあさんはだっこをしながら耳元で小さく「だっこのしゅくだい、またでるといいね」とそれぞれの愛情表現が表れています。また、たくさん「だっこ」をしてもらって満足そうにベッドで寝ているもぐくんの表情は、思わずにんまりしてしまいます。

子どもには、絵本に接する機会をできるだけ多く持ちたいと思っていますが、大人にもぜひ読んで欲しいと思います。心のリフレッシュになると思いますよ。（だいち指導員）

しゅくだいの絵本